

自助、互助、扶助

米沢藩^{※1}政改革を行った江戸時代の名君として知られる上杉鷹山(うえすぎ ようざん、1751年9月9日～1822年5月3日)の「三助」の思想です。

- ・自ら助ける、すなわち「自助」
- ・近隣社会が互いに助け合う「互助」⇒「共助」
- ・藩政府が手を貸す「扶助」⇒「公助」

具体的には、「自助」実現のために、鷹山は米作以外の殖産興業を積極的に進めました。また、「互助」の実践として、農民には、「五人組」「十人組」「一村」の単位で組合を作り、互いに助け合うこととしました。特に、弱者(孤児、孤老、障害者等)は、五人組、十人組の中で、養うようにさせました。

また、一村が、火事や水害など大きな災害にあった時には、近隣の四か村が救援すべきことを決めました。天明の大飢饉(→江戸時代中期の1782年/天明2年から1788年/天明8年にかけて発生した飢饉)では、藩政府が「扶助」として、藩士、領民の区別なく、一日あたり、男は米3合、女は2合5勺の割合で支給し、粥として食べさせる対策を取りました。鷹山以下、上杉家の全員も、領民と同様、三度の食事は粥とし、それを見習って、富裕な者たちも、貧しい者を競って助けました。

参考:童門冬二「小説 上杉鷹山」より

入るを量りて出ざるを制す。

上杉鷹山の格言としても知られていますが、この言葉は、中国の五経のひとつである『礼記』の「王制」にある「以二三十年之通一制二国用一、量入以為出」に由来しています。国の予算を決める際の心得として、収入を正確に計算し、それに応じた支出をするべきという考え方を示しています。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

これも、上杉鷹山の言葉である。「どんなことでもやろうと思って努力すれば、必ず実現できる。逆に、無理だと思っただけであきらめ努力をしなければ、絶対に実現できない」という意味です。

上杉 鷹山

江戸時代中期の大名。出羽国米沢藩9代藩主。山内上杉家25代当主。諱は初め勝興、後に治憲(はるのり)であり、鷹山は藩主隠居後の号であるが、この名で知られる[2]。米沢藩政改革を行った江戸時代の名君として知られる。

※1：出羽国(明治維新以降の羽前国)置賜郡(おきたまぐん、おきたまのこおり、現在の山形県東南部置賜地方)を治めた藩。